



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 B 13 14 15 17 18 19



春色梅美婦新  
初編

遠 13  
841  
1





門 遠  
 號 841  
 卷 1

明治三六年  
 十月十八日  
 購求

春色梅美婦梅の序  
 此竹葉の  
 玉枝

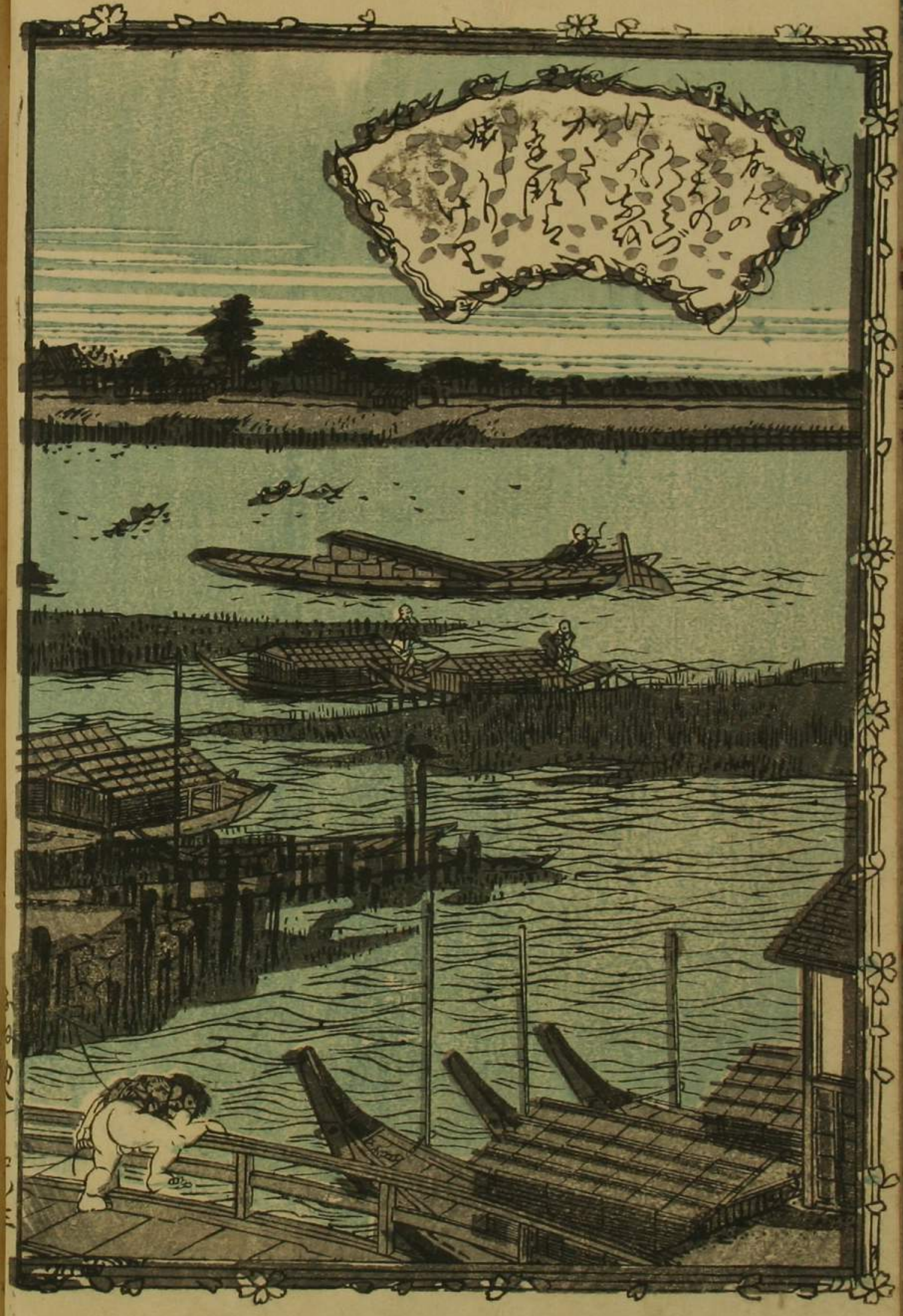
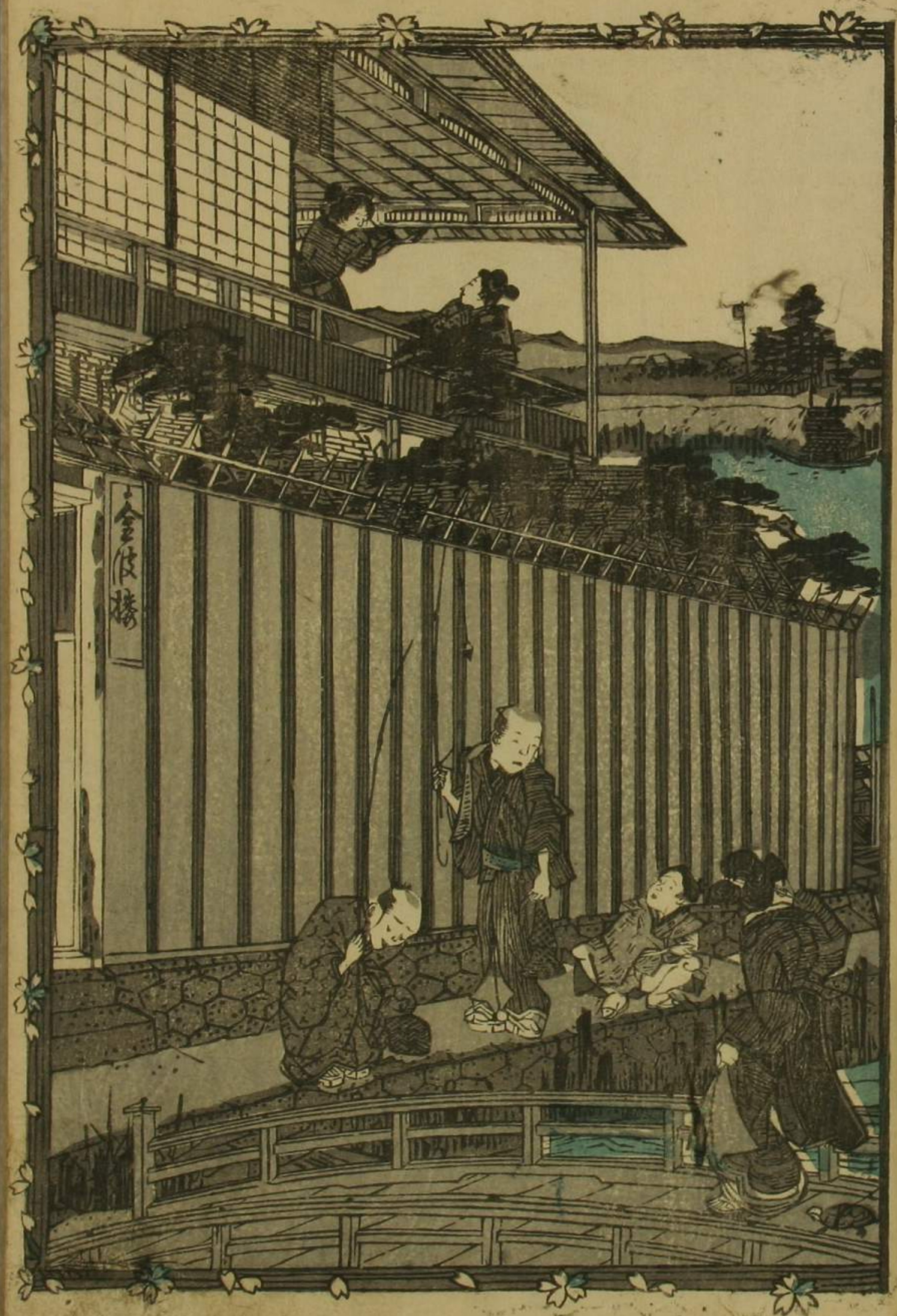
換平が

序の  
 玉枝















和歌町の  
婀娜吉



まはらばらばら  
くふふふふ  
ほき〜〜〜  
まきの夜のま

和歌町の  
米八

春色梅美婦祿卷之一

梅園英對の拾遺

江戸 爲永春水著

第一回

再應説と我愛ともく傍るふ似されど枝くら枝の花と実を  
 まこととくく 治むねが根か 継接の物持り 猶況談せー  
 像を又〜 愛ふ 志る 匠みるん さまも 煮く 産する 豊月小  
 らど 梅園 合ふ 峯次 希 楓 お房の 三人を 和合ふと 斗ふ  
 存め〜 煮る 米八が 好意を 煮りの のとら〜 小元 米八 像



おねいさま 赤丹つるまがる縁の昔決帯八直小柄落し人なればお房の  
西女へ帯一はごうく金次も休も他人が困るはあうくま  
ゆかまき履宮入のわねと姉も姉もか底うら懐か  
獨身の意の痺了らあやくみあうくくはだてま八の帯は  
赤小紅楓の身の上のりせ相談し金の入用八帯は赤が  
何れごうくともおとべーとらあうはせてまはは別する人を  
係くあうく帯は赤と八不言お親元と抱込ぬくお紅楓  
と廊より引とせまて給金利か入用多かからうく

おねいさま 赤丹つるまがる縁の昔決帯八直小柄落し人なればお房の  
西女へ帯一はごうく金次も休も他人が困るはあうくま  
ゆかまき履宮入のわねと姉も姉もか底うら懐か  
獨身の意の痺了らあやくみあうくくはだてま八の帯は  
赤小紅楓の身の上のりせ相談し金の入用八帯は赤が  
何れごうくともおとべーとらあうはせてまはは別する人を  
係くあうく帯は赤と八不言お親元と抱込ぬくお紅楓  
と廊より引とせまて給金利か入用多かからうく



元も孝次郎の側にも金もどく文の振  
 言うと又お妙のふりませ〜とぞお房の婦のめいふ  
 同居とせむてはまごのむきは後とせも米八が善考実志の  
 世話を使ふ彼寄傷も住居を〜内々孝次郎が器と  
 ありいせうけてはせむの〜お金のほむめ〜う〜ぬね  
 徳をけつ〜け〜け〜とぞ姉妹両女とも守保よ月日  
 ころ〜ける  
 紅欄が裏が寢とせ料な金の奥女とある〜お妙の  
 紅欄が裏が寢とせ料な金の奥女とある〜お妙の

あ〜ふあ〜ねどまを委〜く〜と〜ぬ〜ふ〜う〜う〜  
 婦女子の着官あり〜う〜う〜と〜依〜く〜只〜及〜も〜風  
 情よ辰巳へ殺う信よとある〜と〜ハ例の素直の音聲と  
 わ〜〜〜〜〜

○さてもお房ハ廿四日風邪の腦〜あ〜け〜む〜の〜う〜を  
 ぬ〜く〜ぬ〜〜お金ハ疎ア居る友信輩も在る〜が〜置〜  
 仕〜う〜と〜聖敷内所の用のあ〜も〜あ〜して〜将付二階〜あ〜ん  
 かりと替る折〜も貸本金の持てあり〜人債本ま〜人作の



うら  
まふわむじ面白くあふ書物よ借て直さぬよもうら  
あつてきぐさむも又あふうる氣の癖

あつてきぐさむも又あふうる氣の癖  
あつてきぐさむも又あふうる氣の癖  
あつてきぐさむも又あふうる氣の癖

あつてきぐさむも又あふうる氣の癖  
あつてきぐさむも又あふうる氣の癖  
あつてきぐさむも又あふうる氣の癖

の側

一間隔て清川の舟をさそとて公の中ふ。ヲヤ文士さんか  
の弟とて居るといふト奥の文をさそとてけつら  
保入まき海濱も物れまる人の常。むんふ奥のりゆめ  
修行つこみんご身の清くよまのりゆめ  
けきと文士さんと落合さかきりゆめ  
後日ぐは後後さるるゆめ  
一舟のあつてきぐさむも又あふうる氣の癖  
あつてきぐさむも又あふうる氣の癖











切なる根ハ註もろくぬ憂苦勞別くは身ハ飾ら  
人の家初う在どもあつて思ひとうち付ひつて飾  
挨拶を園子の後入居くと姉が結び一極の束を理と  
世間の思ひくせぬくハ香も竹束の切ねるぬ好の身  
殊不母さ入居あつ中の意味さ入あつものを奈何無く  
慕ふバと終遂らぬ二人が中他人の身も在るを  
男一人を両好くそうくくも世の中も多々見聞も  
まろりあれば知くくぬ所あつくと終もにいつても

まが扇屋むのぬもあつてわらま更へあつと人む  
そ今更不註別極入言も世も悲しむの屋も  
極しと終ら入と思案もさまがる胸の中候と高も丹の上  
文字も純潔をさむらん初てき目も暮もそく入せうま  
踏次の足音明てあつあり見板の迹のとも小人あまの  
むの山の音一客寄場の音もさまぐ小楽をハ其の娘の  
寄合と入ハ年の教さねて女房といつて女でも自は  
わづけらまを思ひ入ハ年ハ何娘とあつらあつと



完せりくま再生の眉毛の延きて白齒がさびて前つら  
乳首がさびびて皺があるのと情をれぬお方もあはれど  
盛のころ花より六むで柔肌の憂動も身の内より  
老はと卑らるる何れ精文を見てもあらはる花美の中  
空似合くくま花は思ひまがらも年壯く看せぬ  
笑くも心とあるは家の色の別世界真の通人といふ  
の六則年増女と相手うとも「ナニまご左様かゝるや  
あまの實は我業が正直なるべぬ入業せざるのころは

おれが悦びて居る眼も壯年といふぢやねんまてま  
ちのまろりのハまか生娘の極な行状ぶりのヲ何れと  
業徑とめのと註が書あるのころまご賞とを妹といと  
思ふぬ娼妓唄女ハあるまじくまんざら艶悟とあるまじ  
らもまご身とまごる助とあれバ清らう言業と同一く  
國で腹を丸漬のころけもあまじくおとそ豊平の再  
施と賞ううう美男ううも娘唄女ハつよおまご法の  
女中の不具をうご人秘祝とうご人内容を書き清らう







時分より申渡か面白くまひと言はるるに子や夫より  
私きやうたるの言傳をいせられしヨ 子や婦よえん  
之 米ナニサ別おあふどヨト寛尔笑ひ 米ア子房喜ん  
明日の事程ふお勤しむヨヨ業知り 米アイト完尔  
のどー

第二回

退きき適きもゆき身ひらと折あり頼ふ世  
さるふと強送の人へ婚けん夫ハ百年の余を經て

枯木のどくまうゆる人々瘠人さる毛も角も人並く  
活業とせらる者親族の便ともなり彼是の家藏の  
勤も妻子の不使捨て身ハ易くも夫をいふと  
まる人の出立秘やハ如何さるん然るハ死別の常  
隙もあつてもせぬ道もさぬ安楽の非常をいふ  
まると理屈を言ふ 悟及の人すある人きされど世の神ハ  
遠入といふッ實素も格う頼ふあつて消るは  
可也ものふも只迷ふて思ひの才ハ強欲ま欲の悪人



のい。いろ。情。の。ま。の。女。の。外。に。少。く。送。り。て。看。も。よ。う。と。ま。す。  
扇。屋。の。時。番。人。を。和。ら。う。ふ。し。て。地。帯。を。自。然。と。し。て。ま。す。  
の。ど。う。一。定。の。年。次。第。の。紅。相。お。房。の。両。女。と。も。や。ど。よ。う。  
同。一。里。の。ま。ま。被。采。八。が。さ。う。さ。う。の。う。う。姉。妹。仲。の。満。ち。く。  
性。来。の。両。女。と。母。の。う。う。さ。う。の。新。し。あ。ら。ぬ。双。方。親。の。不。和。の。  
園。の。ま。ま。理。合。が。却。り。思。ひ。を。深。く。さ。る。哀。の。送。り。の。舞。の。ま。  
み。て。送。り。の。時。の。別。最。う。通。り。後。の。本。家。の。信。居。を。所。よ。う。  
う。う。の。姉。ま。川。へ。水。を。お。文。を。う。う。け。て。お。お。ま。ま。う。う。目。を。

送。り。の。ま。ま。け。程。父。の。兄。の。り。け。る。徳。を。傳。つ。と。い。ふ。の。本。国。  
又。及。び。傳。つ。る。有。意。と。う。所。の。寺。一。信。居。を。先。祖。の。連。  
綿。と。相。續。せ。し。か。先。達。を。よ。う。大。意。う。う。て。孝。次。第。の。父。を。  
母。に。人。を。登。せ。し。う。う。が。父。も。病。を。お。れ。バ。バ。の。秘。く。  
妹。の。徳。を。の。方。よ。う。も。之。一。く。甥。の。孝。次。第。小。村。面。を。  
お。ま。ま。の。う。う。く。も。あり。又。存。し。一。寄。の。ま。も。あ。れ。ば。毛。織。  
同。一。の。ま。ま。の。父。の。名。代。と。兼。く。一。人。の。う。う。の。う。う。  
格。よ。猶。も。今。年。十。月。十。五。日。の。先。祖。の。二。百。年。忌。



あられバ大法蓮と勤め交免小舟に古郷の花を咲  
さるむのゆく孝次市代ト一異る様頼入るるの飛  
術引舟をせし四孝次市代に送成るもあられも父の  
名代先祖の祭祀伯父の病も見兼不忌ともいふは  
婦美川の方もあられもいふは是れ水く両女一子尚の金を  
あられと並に二度三度の飛術よせりといふは飛術と  
早も小鎌倉を倉屋一歩ゆもなき隆興の青葉といふ  
新よ美伯父の家いりり病丸の宿体を見むが思ひの外  
あられもいふは

杖もよりしをいふはあられの安堵して怪むを述鎌倉より  
進物土産を親類の家毎に配らせけり物はき田舎  
の人々あられが孝次市代と初色あられその送礼とあられと  
彼方小振られけり方より同寄るは体屋を四入日せり後ハ  
毎日親類の人達も夜射するを勤のてく十日六日を  
あられとあられの申の目殺せり入て四十日の餘古郷を放さ  
る鎌倉の方のあられと別て辰巳の両女のあられと  
思ひ早く帰るあられとあられとあられとあられとあられと  
あられとあられとあられとあられとあられとあられと



先祖とまらつて目出度録倉へ帰るべし 実の事を奉行  
不自由をまき方小着せて懸花の去地小生さし一の程を  
公付けを有る林あり親と伯父との慈悲をれば今暫時この  
田舎に在りて出家の者の活業の体又ハ海川に渡せし  
者ども銀紙辛苦とも見物して異とも産して倉録倉  
町家の安樂を志さるりと登明一家業を大に親達へ  
うらむも苦勞と受けべしと最々志す伯父の異人因  
捨つて帰るもさしむも飛立振一思入とも道中案内を

うらむも百六十入里十二丁の容易路ありざれば公細り  
悲しくなり明後一ふして及住居と定めらるる別圖  
携りくまき寐寝びて人情卒の大古板と詮ありし縁  
返一息を吐くとも居りける 峯で引淋しつて流られ  
身成程人間の一生といふものハ何日何時に極まる  
目を送るもあつたと思ふものごとく程々都さんの古郷  
とつて今日日身が百七十里も奥の山嶺をゆくは  
今月一月でも居候と云ふ思ふも思入ると思ふ







お房が婦多川の娘女ふりううお腰元の紅楓さんとも  
のりきこのものが急が寢の仲の丁の藝者よまるくとお二人が自  
身番横町よ住居をしく櫻川由良帝が新湯の帰は寄て  
そのいでもはうう丁よ室の和十よが俳諧を造るを存めん  
ぞこの身のよよもまるうう何でも人の一代は定つていふ  
のんごア引今頃の姉妹ともゆ何をしく居るうト終言を並べ  
あう又公の仲ふらう目を考へていつか猶わづけりうう一両  
女の身の上被別居の産敷めて其居たる一の怪談が斗ふ  
り

結ぶお房の縁お二人は不思議な事であつて  
まの猶小塞う候と僅一馬折しも隣りのおみん  
音しく極側よも支一極み下女アノ若旦那の様  
余の婦多川とやうう赤井とこやとお紙  
まうま 峯エイナニ婦多川ううけ所  
この常体でるおトト起よまバ下女ハ障子と押  
明てる紙をさう一勝よの方へまて紙跡る  
やとろご子紙の封を切るま入るまううげは押













一日一歩の歩みは平野の入り折の道で直  
 さる風の道はまろりと六入里を半日小鈍子  
 の邊よりまきより猶近なるを早なる路の家  
 龍の如くお里一時とゆきつゝ多かりはる  
 川の和奇町おまり自為浦扶町の家の  
 舟の近づく折も櫻川の波帯唄女の  
 糸八の舟も早く早く早く早く早く早く早く  
 まるまると早く早く早く早く早く早く早く



お在りお在りお在りお在りお在りお在り  
 舟の近づく折も早く早く早く早く早く早く  
 まるまると早く早く早く早く早く早く早く  
 舟の近づく折も早く早く早く早く早く早く  
 まるまると早く早く早く早く早く早く早く  
 舟の近づく折も早く早く早く早く早く早く  
 まるまると早く早く早く早く早く早く早く

舟水  
 舟水  
 舟水







